

## マンチェスター

——分散型野外テーマパーク都市——

高橋 哲雄

### テーマパーク都市

なぜ博物館都市にマンチェスターなのか？

ヴェネツィア、グラナダ、バルセロナ、エディンバラ、ドレスデン、さらにはジュネーヴと、名だたる美しい歴史都市が名を列ねることのシリーズになぜマンチェスターなのか？一九世紀にはじめて都市の体裁を整えることになった新興都市マンチェスター、それも都市の私たちとしては醜悪な巨大スラムと都心の倉庫群や中途半端な成金の郊外の館をその過程で生み落としたのが眼を惹くだけのマンチェスターを、なぜ取り上げるのか。

じつさい、一九八九年に創刊され、いまでは主要なガイドブックの一つである『ペンギン・ガイド』（イングリッド&ウェールズ編）では、マンチェスターはまったく取り上げられていない。「産業遺跡」

の章が設けられているのにそこでも出番を与えられていない。つまり、ろくに見るものがない、観光価値の認められていない都市なのである。

そんな都市をなぜわざわざとりあげるのか、という当然の疑問に対して私の考えはこうである。

博物館の一種、少なくとも一変種であるテーマパークとしてマンチェスターをとらえれば話はまったく別、と私は思っている。ここにはまず、何はなくても「テーマ」はある。それも「資本主義」という、とてつもなく大きなテーマ、そこから枝分かれした「階級」とか「近代」といった、それに劣らぬ広がりや射程をもった問題群をここほど鋭く、身をもって示した都市はないのである。さらに「経済的自律主義」とか「小さな政府」といった高度に現代的なイデオロギーが

生まれたのもここであり、それらは「マンチェスター派」<sup>スケル</sup>の名と結びつけて記憶されている。これらのテーマパークをどこかに作るとするならば、マンチェスターをおいてほかにはまずあるまい。

なるほど現在のマンチェスターは失われた歴史都市ではない。資本主義の心臓部であった取引所は劇場に姿を変え、大スラム街はすっかり姿を消した。倉庫群も多くは百貨店やホテルに姿を変えた。しかし、その痕跡はけっこう残っているし（その変りぶりにこの街の個性を読むこともできる）、インカやアステカ、あるいはシルクロードの都市を廃墟から再現する苦勞に比べれば、写真もあれば文献もある。手掛かりには事欠かない。「近代はここにはじまった」というテーマを街を歩きながら追体験することは十分可能である。

他方、一九世紀のマンチェスターは世界綿業の首都であり、周辺のランカシャー綿業地帯の中心都市であるという二重の意味で「コットン・ポリス」(cottonopolis)であった。その中心部をテーマパークの本館とし、そこから足を延ばして「大マンチェスター圏」ともいうべき広い範囲に散在するいくつもの「分館」を巡り歩けば、「資本主義」や「工業化」の生み落としたさまざまな問題局面がその発生の現場でなまなましく語りかけてくれるであろう。それら分館群がそれぞれ分担してくれるサブテーマには、たとえば次のようなものがある。

「わがままな巨人館——またの名ブルジョワ・パラダイス」

世界で初の産業革命の担い手となったこの地の綿工業の工場主や商

人たちは、多くが自由競争の原理を信奉するセルフメイドマンであった。彼らは煤煙に包まれた都心部を脱出し、しばしば仲間を組んで、ゆたかな自然に恵まれた郊外の丘陵地に広い地所を購入し、邸をかまえたが、そのさい村の周囲に高い塀をめぐらせ、村を通過する道路の利用者からは通行料を取り立てるといふ、この国の精神風土の中では珍しい行動に出ることがあった。南郊のヴィクトリア・パークがそれである。自動車が入るのにも電車が通るのにも抵抗した。オスカー・ワイルドの童話『わがままな巨人』さながらの、この近所迷惑な行動が、実はマンチェスターを代表する政財界や法曹、建築、教育、芸術の各界を網羅する名士たちからなる住民の自治によるものだったという事実は、マンチェスターの自由とは何かについて考えさせられる。

「中世的風景美の工場村館——ブルジョワ・ユートピア」

他方ではしかし、同じマンチェスター・ブルジョワジーといっても、理想主義、あるいは温情主義志向のつよい工場主や商人も少なくなかった。ギヤスケル夫人が『メアリ・バートン』(二八四八)で描き出した工場主や職工の像に対して有力な工場主W・R・グレッグが『エディンバラ・レビュー』で正面切って反論を加えたのは、いかにも創成期の熱い工業化の時代にふさわしい出来事であった。グレッグ家はもと商人で、彼の父サミュエルがマンチェスターの南一六<sup>キ</sup>のノスタリアル村に水力紡績工場を立ち上げて工場主となったが、彼らがこの村に造り上げた労働者の福祉村は、中世以来の村落に融け込んだ美

しきで、数多いこの国の工場村のなかでもまず随一といってよいだろう。この「ブルジョワ・ユートピア」は今はナショナル・トラストの管理下にある。

「コークタウン館——プロレタリアート・ディストピア」

「コークタウン」(Coketown)とはディッケンズの『『つらいご時世』(二八五四)の舞台となった架空の街である。モデルはマンチェスターとも、その西五四キロの綿工業の町プレストンともいわれ、純粹培養的な、それだけに労資の対立がむき出しになりやすい工業都市がイメージされている。資本主義、あるいは産業主義の負の側面を都市のかたちにしたのが「コークタウン」なのであった。

マンチェスターの周辺、南西ランカシャー一帯に多数の「コークタウン」が見られるわけだが、「分館」を置くにふさわしい町となると、ウィガンあたりとなるのか。およそ文学的、歴史的連想を誘うことのないこの砂漠のような地域のなかで、ここだけが辛うじてジョージ・オーウェルの『ウィガン・栈橋への道』(一九三七)を生むことで、文学史に名を残した。ウィガンは炭坑と鉄鋼、綿業の町で、一九三〇年代の不況下では高い失業率に苦しみ、オーウェルはあの長身がかがめて炭坑の狭い坑道に潜り入材し、この時代の空気をめぐりに映し出すポルターージュを書き上げたのである。いまここには「ウィガン・栈橋」の名を冠した、産業史の複合博物館ができています。

「労働者階級御用達の海浜リゾート——プロレタリア・パラダイス」  
「コークタウン」が労働者にとって暗いディストピア(反ユートピア)の現実を示すものであったとすれば、「つらいご時世」の苦難の軽減やひとときの忘却への道を示すユートピアやパラダイスの試みもまたこの地域に生まれた。ユートピアづくりは、たとえば協同組合運動の形をとってマンチェスターの北20キロのロッチデールにあらわれる(一八四四)。

他方、パラダイスの役目を果たしたのは、北西へ八二キロの海辺のリゾートで、鉄道開通(一八四六)以来労働者の娯楽施設が集中するようになったブラックプールで、コニーアイランドを先取りしたような町である。休日にはランカシャーやヨークシャーの工業都市から特別列車が仕立てられ、夏からクリスマスまで海浜の遊歩道にはイリュミネーションが飾られる。わが国では映画「Shall We Dance?」の社交ダンスの世界コンクールで知られるようになった。

こうしたさまざまな顔をつなぎあわせたところにマンチェスターの全体像が出来る上がる。以下、分館めぐりは後回しにしてまずは「本館」に当たるマンチェスターの中心部を訪ねることから出発したい。

### 街の中心——コットン・ポリス

街が三重の同心円構造をなしていて、それぞれが画然と社会的に分離されているのがマンチェスターの特徴だといわれる。中心は商業地

区、その外側は工場と労働者住宅街、いちばん外のリングはブルジョワの郊外住宅地区であると。こういう構成はそれほど珍しいものではないのだが、マンチェスターのばあいはお偉方の通勤する大通りが労働者地区でも商店街になっていて、こうした通りには乞食や浮浪児が現れることもなく、その裏側に広がる悲惨な実態がきれいに遮蔽されているところに特徴がある、つまりここは「分離都市」なのだといわれる。

中心部は、東西・南北軸ともに半マイル（八〇〇呎）ばかりの商業地区である。重要な建物や公共施設はここに集中している。

ただ、街の中心は大聖堂でもなければ市庁舎でもない。いかにもマンチェスターらしいというべきか、資本主義の殿堂たる王立取引所である。古いこの街の案内書を見ると、目的地の場所を示すのにきまつて「取引所から何マイル」と記してある。江戸における日本橋というところか。一九六八年にその役割を終えるまで「コットン・ポリス」の心臓部として、一時は世界の全綿布取引の八割以上がここで行われた。ドームの下の大ホールは最盛時一万一千人の会員でこつたがえしていた。「世界でいちばん大きいルーム」（そういう表題の本もある）というのは誇張としても、「世界最大のトレイダーの集会所」であったことに間違いない。いまでは大ホールはそのまま、真ん中に宇宙船のような中劇場が造り込まれている。残っているのは外殻だけなのに一九九九年にIRAに爆弾攻撃を受けたのは、「資本家階級の神殿」

という残像がよほどつよかったのであろうか。

ここで重要なのはマンチェスターをとらえた産業が「綿」だということである。

綿は本質的に世界商品だった。原料の綿花は北米やインドに、北米での労働力はアフリカに、製品市場は熱帯を含む世界のいたるところに仰がねばならなかったから、流通ないし商業がはじめから不可欠の要素として組み込まれていた。その点で、それ以前の基幹産業であった羊毛のように、地元で原料を調達でき、国内や大陸を主な市場とする商品とは、立脚点も、スケールも根本的に違っていた。また、需要の質が多様で、それに応じた多種多様な原料や糸、布を提供する必要も、商人の役割を大きくした。一九世紀中頃には世界綿花の半分をここで消費し、イギリスの全輸出の半分をランカシャーの綿製品が占めていたのだから、それだけでもこの町のコスモポリタンの性格は明らかといわねばなるまい。

### 小さな教会、壮麗な倉庫

市庁舎、金融機関、商工会議所、主な教会、博物館、美術館、ホールも、ほとんどがこの地区にある。

このなかで注目したい存在はクロス・ストリート・ユニテリアン教会である。大聖堂が商業地区の北のはずれ、増殖した労働者住宅街の海に半ば吞まれるような存在となっているのは一九世紀のイングラント北部における国教会の弱体化した立場を象徴するかのようである。



これが教会？ クロス・ストリート・ユニテリアン教会

それにひきかえ、ユニテリアン派は一八五〇年のセンサス時にイギリス総人口の〇・五%を占める小会派にすぎないのに、マンチェスターでは、キリストの神性を否定する自由で合理的な、というかある意味で宗教らしくない教義が土地柄とマッチしたせい、とくに知識人や経営者、政治家の間で根強い支持があった。一九七七年の資料によると、それまで七人の市長、一五人の国会議員がこのチャペルと結びつきを持っていたという（市制施行は一八三八年）。

この小さな教会は繁華街の真ん中にあり、一八三〇年から、のちにギヤスケル夫人の夫になるウィリアム・ギヤスケル師が副牧師（のちに牧師）を勤め、社会改良的性格の濃い知的社交界の中心となつてい

た。ギヤスケル夫人が『メアリ・バートン』（一八四八）などでスラムの実情を詳しく描くことができたのも、教会を中心とした結びつきによるところが大きかったのである。いまはすっかりモダンなビルに建替わってその一、二階を占め（二階にギヤスケル関係の資料がある）、インターフォンで用件を言つて開錠してもらおうという始末で、かつての面影はないが、それもまたユニテリアンらしいといえなくもない。案内してくれた中年女性になぜこんな原形を留めぬ改築をしたのかと聞くと、ここは一等地だから高層にしてテナントを入れないと勿体ないといういかにも合理的なご返事であった。

もともと商人、工場主の居館もこの中心部にあった。階下が事務所、階上が住居というところも多かった。ところが、彼らはロンドンやパリ、エディンバラとちがって都心生活への誇りも愛着も乏しかったようだ。ひとつには工場街に囲まれていたため、煤煙や水質、臭気、騒音など、生活環境が劣悪だったこともある。またひとつには消費・文化都市のもつ愉しさがここには欠けていたこともある。あるいは新興都市の常として、彼らも多くはよそ者の集まりだったせいかもしれない。商業機能の都心への集中につれて、彼らは郊外の快適な丘陵地帯へと脱出し、そこから乗合馬車か自家用馬車で通勤する生活をえらんだ。

彼らの邸に代わって中心部を占拠したのが倉庫である。倉庫といってもわれわれのイメージにある赤煉瓦の暗鬱で殺風景な建物——小樽



これが倉庫？ウォットの倉庫、1866頃

や、もつと大規模にはハンブルクの運河沿いに見られる——を想像してはならない。繁栄に沸く企業はきそつて最高の評判をとつた建築家を使って壮麗な、しばしば手の込んだ装飾を施したモニユメンタルな倉庫群を建てさせた。なぜか多くはヴェネツィア風のパラッツォを模したそれらは、いままも壮麗な外壁はそのままだにホテル、百貨店、ショッピング・センター、銀行などに中味を変えている。

公共建築物も、ロンドンの自然史博物館を設計したアルフレッド・ウォーターハウスのネオ・ゴシックの市庁舎（一八六八―七七）をはじめとして、ロンドンに負けじと贅を凝らした。そういえば、ロンドン、あるいは「南」への対抗意識もこの「北」を代表する都市のアイデンティティの一つの柱である。ヴィクトリア時代のイギリスを自由

貿易の国に宗旨替えさせる集まりの主な舞台になったフリー・トレイド・ホールは、マンチェスター派の暁将リチャード・コブデンの寄贈にかかるヴェネツィア・ゴシックの堂々たる建物で、彼自身やジョン・ブライトが熱弁を揮い、ディッケンズが芝居を打つた由緒もあるところだが、いまは正面の壁面を残してホテルに建替え中である。ヴィクトリア時代は総じて建築史のうえでは混濁と折衷、前例のない「趣味の雑種化」の時代であつたが、なかでもマンチェスターはそれら諸様式の展示場の観があつた。

### 黒いベルト——工場とスラム

中心部を取り巻く幅約一・五マイル（二・四キロ）の広い带状の地域はもっぱら労働者住宅街と工場で占められている。ここには三本の川と四本の運河が繋がつたり通り抜けたりし、鉄道路線も駅もすべてこの地域内を通っている。一七九四年にシッブ運河が開通してマンチェスターはイギリス第三の海港になり、生産と物流、そして労働力のすべてがここに集中した。駅を除いてめぼしい建物はない。ただ、ここでも倉庫と同じく、「工場」というわれわれの既成イメージはくつがえされる。いままも残っている工場はないが、文献や写真からみると新しい時代のステイタスを誇示するかのような、往々五、六階建ての、装飾的にも配慮した、この時代のキーワードを借用するなら「堂々たるかまへの」建造物群であつたようだ。工場の多くは川や運河沿いに立ち、それらの周辺をびっしりと低層の（多くは地下つき二

階建て)労働者住宅群が海のように埋め尽くす。

この地区についてはフリードリッヒ・エンゲルスの委曲を尽くした描写がある。

エンゲルスとはマルクスの盟友であり、国際共産主義の父であったあのエンゲルスである。ドイツの紡績工場主の長男に生まれ、父の命で一八四二年末に二二歳でマンチェスターの「エルメン&エンゲルス商会」(主力のヴィクトリア工場は一八三七年建設)に赴任し、翌々年八月に離任するまで二〇カ月滞在し、その間恋人であるアイルランド人女工メアリ・バーンズらの案内で地獄の釜の底と呼ばれたスラム生活の実態をつぶさに観察することができた。その成果は翌四五年に刊行された『イギリスにおける労働者階級の状態』に読むことができる。

とくに「スラムの三悪」と呼ばれる劣悪な居住条件——通気や採光の悪い棟割長屋、ときには百軒に一つもトイレがないため汚物や悪臭の吹き溜まりになる路地奥の空き地、湿気どころか水浸しの地下室暮らし——や、それに劣らず貧しい食生活、とどのつまりは病気、短い寿命、道徳的墮落が描かれ、最後に失うものなくなったプロレタリアートの決起が示唆される。

いまこうしたスラムはもろろんない。はじめて私がマンチェスターを訪れた一九六八年にはスラム・クリアランスが相当進んでいたが、それでもいくらかは残っていた。何度目であったか二〇〇三年に訪れたとき、エンゲルスが最悪のスラムの一つとした「リトル・アイルランド」の辺りを歩いていて、公営住宅の煉瓦の壁にその記念銘板を発



かつてのアイルランド人労働者のスラム跡

退去、三〇年間放置された後解体されたことがわかる。周辺はいまも荒涼として未舗装の駐車場やゴミ捨て場になっている空き地、人の住む気配のない建物がまばらに立っていた。

### エンゲルスの謎

不思議といえば不思議なのだが、若きエンゲルスの著書が同時代のイギリス人、とくにマンチェスター人に影響を与えた形跡が見つからない。人々の目に触れる機会がなかったのだろうか。

『状態』はライプツヒで出版され(再版一九九二年)、英語訳はアメリカで一八八七年、イギリスで一八九二年に出版された。エンゲルスは最初のマンチェスター滞在の六年後の一八五〇年に再来し、会社

見した。「リトル・アイルランドの跡地。多数のアイルランド移民労働者がさまざま条件下でここに住んだ。一八二七年頃建設。一八四七年頃退去。一八七七年頃解体」とある。エンゲルスが去って二年後には、築二〇年でもう無住となり(たぶん疫病などで強制

の共同経営者として、以来二〇年をこの地で送る。その間、一方では取引所の会員として財界活動もこなし、乗馬クラブや狐狩りなど社交界でも活躍するが、他方表向きの住まいとは別の住居をひそかに労働者街におき——これは転々としたようだが——そこではメアリと同棲し、社会主義運動のための執筆活動を行った。これが有名なエンゲルスの二重生活である。

マンチェスターにはドイツ人商人も多く、独自のコロニーをつくつていて、彼はそこで世話役のようなこともしていた。そうした国際的情報都市で、匿名で書かれたわけでもないエンゲルスの本が本当に知られないままだったのか、ちよつと信じがたい気もしないではない。

しかし、マンチェスターにおけるエンゲルスをテーマとしたどの研究を読んでも、どうやら彼は芸術的といってよいほどみごとに、表の世界では裏の世界でもう一人の彼を消し去っていたようである。マンチェスターにおける「二つの世界」、あるいは「二つの国民」の存在と両者の完全な分離についてのエンゲルスの先駆的な知見は、彼自身と両者の特異な体験の所産であったのかもしれない。

## スラムと文学者たち

こういうことをいうのは、たとえば、エンゲルスの本の三年後に刊行され、同じく労働者の生活を彼とよく似た視点から描き出した『メアリ・バートン』（一八四八）に彼の影響がまったく読みとれないからである。

この時期のイギリスの文学者に取り付いていたのはいわゆる「英国の現状」問題（Condition-of-England Question）だった。産業革命の暗部が誰の眼にも明らかに始まりはじめ、新救貧法（一八三四）が弱者にはいつそう酷薄な役割を演じ始め、チャーティスト運動が高揚をみせた。マンチェスターにはピーターラーの虐殺事件（二八一九）などといった注目が集まっていた。当代の代表的な文学者たちはマンチェスターの提起した問題の深刻さに打たれたのである。

まず、警世の士といおうか、もつとも預言者の風格のカーライルが動いた。

「英国の現状」問題という言葉を作ったのは彼である（『チャーティストム』一八三九）。次いで『過去と現在』（一八四三）ではマンチェスターを「驚異」と「恐怖」にみちた町であると、しかし自由放任的経済政策や普通選挙デモクラシーによっては貧困や墮落の問題は解決せず、中世的な秩序に帰って英雄的な力をふるうことが必要とする。この町は古い預言者都市エルサレムになぞらえうる、英雄あるいは預言者の出現を期待できる町だというのである。

彼の影響を受けた若い日のデイズレーリもマンチェスターの活力に魅せられながらも、その問題性に警戒の声を挙げる。のちの大宰相は四十年代には成功した小説家であり、小説『コニングズビー』（一八四四）で、工場制度を「こんなに完全な封建的システム」は存在したことがなく、搾取をコントロールするためには中世的な精神的伝統に立つ政府の規制が必要であるとする。それが彼の標榜する「あたらし



「トーリー主義」だというのである。

やはりカーライルに傾倒していたディッケンズは『つらいご時世』（一八五四）を彼に献呈した。マンチェスターはそこに出てくる架空の工業都市「コークタウン」のモデルの一つだった。彼は早くからここに興味をもっていて、一八三七年、五二年と訪れているが、どうやら中世主義者の彼には、大工場中心のマンチェスターよりは町工場と職人の町バーミンガムの方がお気に入りだったようだ。「バーミンガムの工場には美しい秩序と規則正しさがあがり、働く人びとへの配慮も行き届いているので、模範とされる資格がある」と。それに比べて「コークタウン」といえば誰でも知っているが、どの綿工業の町も、あれは他所の町のことだと押し付け合いになるのだという。

ギヤスケル夫人に戻るとしよう。

マンチェスターの問題を描いた著名な文学者のうち地元出身は彼女だけである。彼女も生まれはロンドン（チェルシー）で、幼時母を亡くし、マンチェスター南西三〇<sup>キ</sup>の気持ちいい田園の町ナツフォードで伯母に育てられた。一八三二年に同じユニテリアンの牧師であるウィリアム・ギヤスケルと結婚してマンチェスターに移った。ユニテリアンは小会派であるだけでなく、三位一体を否定するという過激な、あるいは世俗的合理主義に近い立場をとっていたため、一六八九年の宗教的寛容法のと きもカトリックとともに寛容の対象から外されたといういわくつきのセクトである。当然会派内でしか結婚もむつかしいし、内部の団結も固く、ビジネスの情報網もしっかりしていた。

マンチェスターのばあいは街全体に行きわたっている新興都市特有の伝統の欠落が宗教面にも見られ、国教会支配が弱く、アイリッシュ・カトリックが数の上では多いという特徴があった。ユニテリアンが力をもったのにはそういう背景もあった。さらにいえば、ユニテリアンは他のセクトに寛容であった。あとで見る紡績業者のグレッグ家はユニテリアンであったが、経営者の間では嫌われ者の、労働条件改善への圧力団体であったメソデリストに、早くから工場村で教会施設を提供している。ユニテリアンがこの街の知的サークルの中心となった背景にはそうした精神風土があったのだ。

グレッグが、同セクトの名士夫人の作品であるのに、あえて『メアリ・バートン』に『エディンバラ・レビュー』誌上で長文の批判を試みたのもそうした開明性のせいではなかったか。といっても、この書評は批判というより工場主たちの弁明に近い。この小説で資本家を代表するカースンとその息子、労働者を代表するヒロインの父ジョン・バートンの描き方には一方的な誇張が見られる、と彼はいう。貧しい労働者の間での、自分たちの窮境に無理解な資本家への敵意の広がりを実際以上にきびしく描かれている。現実にはバートンのような熟練紡績工の賃金は高く、貯えも十分可能なのだが、多くのばあ「飲む打つ買う」に加えて組合への醸金、家政能力のない女性との結婚などで生活が苦しい。バートンのばあいは自信過剰で不注意、組合や政治に熱中するのにならして、カースンは同じく熟練紡績工上がりなのだ。が、慎重で先を読む力があり、仕事人間であったため、工場主にのし

あがることができた。両者の運命が分かれるのは当然なのだ、と。

労資の利益分配があまりに不公正であると小説では強調されているけれど、資本家には多くのリスクに備える責任があるのだといい、また現実には、多くの資本家は、とくにマンチェスターでは、不況にさいして失業者や貧民の救済に力を尽くしているのに、それも描かれていない——と、そういった調子なのである。書評の場を借りて、経営者の立場を大いに弁じた中味になっている。

### 美しい工場村

グレッグがこういう発言をあえてしたのは自己の実績への自負の念があつたからだろう。

たしかに彼らの最初の紡績工場であるマンチェスターの南一六<sup>キロ</sup>のクアリー・バンク・ミルでの労働者の生活はマンチェスターのスラムのそれとはまったくの別世界であつた。それは工場のあるスタイル村に一歩足を踏み入れればすぐわかる。ヴィレッジ・グリーンに面した、おそらく村では標準的な長屋オーク・コテッジの辺りに立つてみよう。

まず家庭菜園が各戸の玄関先に与えられていて、野菜でも花でも作れ、余分が出れば村のショップに売ることも出来る。ショップは協同組合式で運営され、利益は分配される。各戸は一階に居間と台所、裏庭と便所が、二階に寝室が二つ、そして地下室がある。貧しい家族の地下室居住は見られず、無収入の未亡人だけに認められていた。すぐ



スタイル村のオーク・コテッジ——左側が家庭菜園

近くには古い農家風の藁葺木骨の家に二—四戸で住む場合もあり、庭が広いので家畜を飼うところもあつた。賃金はマンチェスターより低いが、物価が安いので生活水準はこちらの方が高かつたといわれる。死亡率はマンチェスターの五分の一であつた。

もともと水力を求めての立地であるから、労働力不足は覚悟の上であつて、グレッグは労役場から連れてきた孤児、とくに少女を頼りとし、医師つきの寄宿舎に収容した。放擲、乱交、墮落がつきものとされるこの種施設の中で設備は快適、管理は行き届いていて、子供は野外や自分の庭で遊ぶこともでき、初等教育を受けることもできた。人口七万人のマンチェスターで学校に通う子供は百五十人しかいなかった時期のことである。数人の少年は支配人の地位にまで昇進

した。

さわやかな森を抜けての川沿いの遊歩道歩きを愉しむこともできるし、春から夏にかけてはどの家にも花がいっぱい、イングランド北部に数多い工場村の中でもこれほど牧歌的な気分を味わせてくれるところはまずない。ナショナル・トラストの環境保存の巧みさもあるのだろうが、経済史家アシントンが認めるように、グレッグが景観の魅力に無感覚でなかったことが大きかったのではないか。

### ヴィクトリア・パーク——排他的楽園の創出

グレッグやオールドノーのように社会改良的志向の強い、家父長型の工場主はマンチェスター資本家の一つのタイプではあるけれど、典型とはいえないだろう。多数派であり典型的な行動をとったグループはもともと短期的な自己利益中心主義である。それを端的に示したのが、都心から南へ二マイル（三・六キロ）のところに一八三七年に開発を始めた高級住宅地ヴィクトリア・パークに集まった人びとであった。

商人や工場主の郊外住宅造成はおよそ次のようなコースを辿って進められた。

まず綿業のブームに伴って取引所周辺のマンチェスター都心部の地価が高騰する。そこに住む実業家は邸を売って郊外に広大な土地を買う。売った邸は、既述のように多くが倉庫に姿を変えた。労働者も家賃が高くなるので住めなくなり、その結果都心部は夜になると無人の

商業地区となる。他方、取得した郊外の土地には実業家自身がりっぱな邸を建てたり魅力的な土地利用計画を立てたりして、その地域にファッションブルな高級住宅地のイメージを造り出し、資産価値を高める。そのうえで余分の土地を売却し利益を得る。

そのさい、貧しい人たちが入り込むと土地の価値が下がるので、それを防ぐようしばしば集団を組んでまとまった土地を購入する。まとまって行動すれば地価を吊り上げるのも容易である。一つの「地区」として自己の資産価値を守るため、外部、あるいは周辺の利益を犠牲にすることもあえて辞さない。ヴィクトリア・パークで起こったことはまさにそれであった。

まず、地区の周りに、貴族の地所をかこむ塀に似た長大な障壁をめぐらし、要所には門を設けて出入りを制限した。住民と来客以外の出入りを原則として認めなかったが、面積にして五八畝、東西一・五キロに及ぶ地所であり、以前からその中央部を交通量の多い道路が南北に通っていた。しかし、彼らは通り抜けを認めず、通行料をとった。慣習で守られた通行権を主張する周辺住民や行政との間には当然軋轢が生まれることになる。

事実、ヴィクトリア・パークはいくつもの訴訟に巻き込まれた。村の創設者はマンチェスター建築協会の初代会長のリチャード・レインで、隣市のソールフォード・タウン・ホールなどの設計を手がけた大物である。しかし彼は、二人の親しい地権者に有利な土地利用計画変更案をつくって彼らの土地の価格を吊り上げて転売させ、不当な利益を

与えたかどで訴えられた人でもあった。

また、こういうこともあった。地区外の人が相続でパークの東半分にある未利用の土地を入手し、それを近くの大地主に転売した。地主はその土地を使って六五〇戸ものテラスハウスを建てる計画を立てた。パークの理事会は安っぽい家が大量に出回ることによってパークのイメージが傷つくのをおそれ、年間地代が五〇ポンド以下の家を建てることを禁止し、そうした建築の関係車両が村内に入るのを禁止する決議を採択したりした。最初に建築への制限条項があったことを根拠にしてのことである。紛争は長びいたが、ゲイトの一つが地主側の建設業者の土地に掛かっていたこともあって車両の通行は可能となり、結局は地主側に有利な結果に終わった。今日、その辺りはとてもヴィクトリア・パークとはいえない、ごくありふれた、日本のどこかのテラスハウス団地と変わらない住宅地となっている。

当初の著名な村民にはあのリチャード・コブデンをはじめ、市庁舎の大ホールにこの市の歴史を描いた壁画群を残した画家フォード・マドックス・ブラウン、ハレ交響楽団をつくりあげたチャールズ・ハレなどがあるが、主力は商人で、そのうちかなりがドイツ商人だった。工場主と専門職、とくに法律家がそれにつづく。政治的には反穀物法連盟と繋がっている顔ぶれが多く、数人の自由党国会議員がいたが、保守党の議員もみられた。マンチェスター、ソールフォードの市長もいた。

つまり、ヴィクトリア・パークはマンチェスターの各界のエリート

を網羅していたのである。その筆頭に挙げられておかしくないリチャード・コブデンは成功したキャロコ捺染業者であり著名な国会議員であり、それ以上に「コブデニズム」の名で知られる自由放任の哲学の唱道者として知られる。しかし、それは今日われわれの間にも瀟漫しているあの弱肉強食を是認する主張ではなく、一方では軍縮や植民地分離を含む小さな政府を実現するとともに、他方では国際的自由貿易をつうじて保護主義ナショナリズムの壁に穴を開け、紛争の防止、国際平和の実現に向かおうという、むしろきわめて理想主義的な行動原理なのであった。

だから、彼も彼の盟友であるジョン・ブライトも、一八五〇年代の対インド、中国、ロシア戦争に見られる自国の帝国主義的な侵略行動には、いかにそれが経済的には有利なものであっても強く批判を繰り返した。ところが、表面上は彼らの思想に共鳴していたか見えなかったマンチェスターの資本家は、いったんそれが自己の利益に合致しないのを見て取ると彼らを平然と裏切った。コブデンもブライトも一八五七年の総選挙では、反対派の候補を立てられて落選した。コブデンは、ランカシャーの工場主たちはインドや中国のことを武力でしか解放できない大冒険計画とみなしているといい、「穀物法廃止のため戦った人びとのうち自由貿易の原理の本当の意味を理解している者のなんと少数であることか」となげく。

こうしたマンチェスター資本の本音の部分がヴィクトリア・パークという彼らの私的領域ではより露骨なかたちをとった。コブデンはこ

こにはせっかく家を建てたのに一八四五―四八年の間しか住まず、故郷の南イングランドの西サセックスに土地と住居を買って一八六五年の死までをそこで過ごす。六一年の生涯のうちわずか一五年しかマンチェスターでは過ごさなかった。公私共に彼はマンチェスター人の精神態度や文化になじめないものを感じていたように思われる。

同じことは、事情は異なるが、エンゲルスについてもいえないだろうか。彼の二度目の長期滞在は二〇年に及び、バーンズ姉妹（メアリの死後妹リジーと再婚）との事実上の結婚関係もここではじまったものだった。しかし、彼は有利な引退の条件をかちとると、ただちにこの地の滞在を終え、「解放感と悦びに満ちて」ロンドンへ向かった。よく知られているようにマルクス一家の生活費を稼ぎ出すために意に染まぬ仕事をつづけていたのではあるけれど、彼の手紙によく出てくるこの土地の「俗物ども」との付き合いからの解放も彼を喜ばせたのではあるまいか。

ギヤスケル夫人の場合はすこし違うかもしれない。彼女と夫のユニテリアン教会はマンチェスターの社会的、文化的エスタブリッシュメントの重要な一部をかたちづくっていた。ヴィクトリア・パークにも親しい人びとが少なくなかった。

しかし、彼女も最後には南イングランドに終焉の地を求めた。彼女は性格的に富裕なユニテリアンとはどこかそりが合わなかったかもしれない。まず、『メアリ・バートン』への風当たりのつよさは予想外で、一途な彼女にはこたえたかもしれない。あるいは、豊かになるに

つれて国教会へと改宗する彼らの俗物性がおどましく映ったかもしれない。『北と南』（一八五四）のヒロインのように『ミルトン』（マンチェスター）生活のストレスに耐えられなくなっただけのことかもしれない。いずれにせよ、マンチェスターに何かのゆかりをもつ、ひとかどの人で、そこを最期の地とした人はごく稀なのではなからうか。ここに生まれたド・クインシーも、学生時代を送ったギッシングもついにこの地に戻ることはなかった。

今日のヴィクトリア・パークにかつての面影を求めることはむづかしい。西半分の大きな邸のかなりの建物が大学の学生寮に改装され、もとのままの建物が残っているのは二二戸で、そのいくつかを見学するツアーも行われているけれど、ここは村全体の囲いこそ消滅したが、個々の家は塀や樹木で視線を遮られることが多く、歩いていてうっとおしく、目を愉しませる要素が乏しい。スタイアル村に比べると、一軒一軒は比べものならぬほどりっぱなのに、村全体としてははるかに愉しみに欠け、心なしか精神の貧しささえ感じさせられる。新自由主義の信奉者にみせたい負のモニュメントがここにあると思わずにいられなかった。

### ウィガン棧橋はあるか？

場所は一転して西へ三八<sup>キ</sup>ばかりの炭坑と鉄鋼、綿工業の町ウィガンに飛ぶ。

炭坑と工場のほか何もないこの町を一躍有名にしたのはジョージ・オーウエルの『ウィガン 棧橋への道』(一九三七)である。一九三六年、世界大恐慌がやつと底を脱けかけた頃、オーウエルは、人気のシリーズ「左翼読書クラブ」の版元であった出版社主ゴランツに依頼されて、まだ深刻な不況下にあったイングランド北部の労働者の生活実態のルポルタージユを書くため、二カ月の調査旅行に出かける。

ウィガンは石炭も綿も悪かったため、失業率は三〇%を越えていた。彼はここに三週間ばかり滞在し、臍物屋に下宿して不潔さと臭いに悩まされ、過労で寝込んだりもしながら、長身をかがめて狭い坑内に入り込み、精力的に人に会い、集会に出、資料を読み漁った。その結果が三〇年代を代表する名編の誕生となる。正統派左翼であったゴランツは前半のルポルタージユ部分には満足したものの、後半のオーウエル独自の社会主義観(「科学的」ならぬ「情緒的社会主義」)には当惑し、多少のやりとりののち、異例の「序文」をみずから付けることで、人気叢書の一冊として刊行することになる。

この本を読んでまず戸惑うのは題名の「ウィガン 棧橋」(Wigan Pier)のいわれがわからないことであろう。この言葉は文中一箇所しか出てこない。第一部の終わりに「有名なウィガン 棧橋を以前から見たいと思っていたのに、残念にもそれはすでに取り壊されて、かつてそれがあった場所も今でははっきりしない」とポツリと記しているだけだ。これでは題名のいわれはおろか、棧橋そのものが何であ

るかさえわからない。私もはじめて読んだときは首をひねった。

その後読んだジョージ・ウドコックの研究(奥山康治訳『オーウエルの全体像』晶文社)によると、この「ウィガン 棧橋」というのはラシカシャーのジョークで、この地方では年一回の祭日連休(May Day week)には労働者の家族の間で楽しみにされていた海浜リゾートのブラックプールまで遊びに行けない場合、「ウィガン 棧橋に遊びに行く」としゃれのめすのだという。またウィガンは内陸にあるから「棧橋」などは存在せず、「ウィガン 棧橋」とは「どこにもない場所」なのだともいう。さらに、オーウエルはパリとロンドンでの浮浪生活のあいだ浮浪者とは簡単に友達になれた経験から、労働者ともおなじように親密になれるものと思っていたが、北部ではそうはいかなかった。この本の題名がアイロニカルなのはそのせいかもしれない、ともウドコックはいう。

ウドコックのいうとおりだとすれば、『ウィガン 棧橋への道』という表題は「どこにもない場所」、つまり労働者との連帯を求めての、しかもそれが得られなかった徒勞の旅というほどの意味になるうか。なるほど、オーウエルの北部行きが挫折の旅だったというのにはあることだ。彼は本書中でも、また外のところでも「浮浪者のなかにはすんなりと入っていけるが、普通の労働者の生活にはなかなか溶け込めない」といった意味のことをくりかえし述べている。

しかし、「棧橋」が架空の存在だから、同じく実際には存在しない連帯の象徴なのだという議論は成り立たない。第一、棧橋は実在して

いたのである。ウィガンはたしかに内陸部にあるが、ここにはリヴァプールとリーズを結ぶ運河が通っていて、かつては石炭を積み出す木製の栈橋もあった。オーウエルの言葉はフィクションではなかったのだが、カナダ生まれのウドコックはそのことを知らなかったようにみえる。

### 栈橋の歌

ところで、この栈橋という言葉には船着場とは別の、もう一つの意味があった。

ブラックプールでも、もう少し高級な南部海岸のブライトンでもいい、イギリスの海浜リゾートを訪ねると、きまって海中に突出し、遊戯設備（ダンスホールやゲームセンター、食堂など、それにもちろん遊歩デッキ）をのせた長い栈橋が眼につくだろう。それが「ピア」なのであって、当時の労働者階級の余暇文化を象徴するような意味を持っていた。一九三〇年代の労働者一家にはあこがれの、しかし叶えにくいあこがれの行楽先であった。「ウィガン栈橋」とは、つまり、この海浜のピアに引つ掛けた暗い、何とも切ないユーモアなのであって、ブラックプールの栈橋で遊べないのなら ウィガンの栈橋で遊べばよい

スイスのアルプスで遊べないのなら ウィガンのアルプス（石炭のボタ山）で遊ぼうよ

といったふうに、ミュージック・ホールの芸人が口にして有名になっ



ブラックプールの遊技栈橋

たせりふなのである。

つまり、これは当時のイギリス人ならだれでも知っている類の言葉で、だからオーウエルも説明抜きでそれを使ったわけだ。ところが、こうした大衆文化、あるいは労働者階級文化は外国人研究者にとってははもともと入りにくい領域である。ウドコックのようにカナダ生まれと

いいながらイギリスで教育を受け長年イギリスで暮らし、オーウエルとも付き合いのあった人でさえ、イギリス人ならまず考えられないような見当外れの誤りを犯すことにもなるのである。

われわれ日本人研究者についてもそうではないか。

「ウィガン栈橋」についても、私の知るかぎり、高木郁朗・土屋宏之の訳書をはじめほとんどのばあい「ウィガン波止場」または「ウィ

ガン埠頭」と訳されている（奥山康治のみが一部「ピア」を混用。なお、ここに記したことを一九八六年三月号の『ちくま』に書いたせいか、一九八八年ごろからオーウェル研究者の間で「ピア」表記が多くなった。そういう役割を果たしたのであればうれしい）。しかし、辞書を引き、実物を見ればわかることだが、海浜の遊戯棧橋は、「波止場」、つまり土石、コンクリートを積んで築かれた突堤の上につくられているのではなく、また必ずしも「埠頭」、つまり船着場の役目を果たしているでもない。木や鉄骨を組んでつくられた「棧橋」の上につくられている、遊戯施設が第一、遊覧船の発着するところは少ないのである（グレアム・グリーンンの『ブライトン・ロック』にちらと出てくるブライトンのピアを丸谷才一がちゃんと「棧橋」と訳しているのはさすがというべきか）。それと引つ掛けて使われている限り、ウィガンのピアも「棧橋」としなければならぬはずなのだが。

波止場でも棧橋でも、その区別自体はどうでもいいことだけれど、そうした遊戯棧橋のあることを知らないでいたら、このジョークの意味はよくわからないのではないか。すなわち、ウィガン棧橋とはウドコックのいうような、まぼろしの連帯の象徴ではなくて、労働者のおかれた冷厳な現実の象徴なのである。いいかえれば、ブラックプールの棧橋に象徴される労働者のパラダイスではなく、石炭の積み出しもできなくなつて取り払われた、失業と貧困のデイストピアを指すものと理解すべきではないだろうか。

第二部の冒頭に「マンダレーからウィガンへはずいぶん遠いのに、

なぜ思い切つてウィガンに行く気になったのかは自分でもすぐにはわからない」という、やはり象徴的な言葉がある。「マンダレー」とは彼が警官として勤務したビルマの地名であり、この件りは抑圧者の立場から被抑圧者のなかへ本当に入つて行くことの困難を示すものと受け取つてよい。彼らのおかれたデイストピアの現実を知ることがまず必要で、その認識への道程を踏み出したというのがこの題名の意味ではなからうか。

今日のウィガンは、運河沿いにかつての倉庫や工場を利用したその名も「むかしの暮らし」(The Way We Were) という一九〇〇年代の生活を再現した民俗・産業博物館を新しい中心としている。教室では観光客相手の授業もおこなわれ、労働や遊びも紹介される。巨大なエンジンが目玉に置かれ、炭坑労働の疑似体験もできるし、水上バスで運河巡りをすることもできる。オーウェルの時代には二〇もあつた綿工場はなくなつたが、新しい産業も入つてきて、人口も二〇〇四年には八五八九〇人と、大不況前のピークである一九三〇年の八九四四七人に迫ろうとしている。煤煙も、黒くよどんだ運河もなしに。

### 海浜の庶民天国

さて最後に、その労働者の天国ブラックプールをぜひとも訪れねばならない。そういえば「きみはときどきブラックプールに行くようだが、あそこのどこが面白いのか」と、イギリス研究者からも訊かれる



ことがあり、意外に知られていない町なのである。

すでに見たように、ブラックプールはイングランド北部切つての大  
海浜リゾートで、一八四六年に鉄道が通つてから二十世紀初めまでに  
ほぼ今日の姿を整えた典型的なヴィクトリア朝都市である。「世界で  
もっともうまく行つた労働者階級リゾート」といわれ、季節にはラン  
カシャー、ヨークシャーの家族連れの労働者の大群で街も浜辺も埋め  
尽くされる。コニーアイランドの先輩格で、たしかに私はここで日本  
人の顔を見たことがない。見るにたる自然も、歴史遺産も、文学巡礼  
の対象も、きれいさっぱりと欠落した土地だから、むりもないところ  
だろう。

イギリス人も、中流人士はここは縁がうすい。

ブロンテ三姉妹の末娘アン・ブロンテは一八四九年に北東岸の保養  
地スカーバラで亡くなった。ハワースの牧師館から重病人を動かす療  
養先としてはブラックプールの方が近くて、気候もよいのに、そちら  
を選ばなかったのは、景観も土地柄も、彼女の終の棲家にふさわしい  
と誰も思わなかったからにちがいない。実際、彼女の眠るセント・メ  
アリ教会の海をみはるかす斜面の墓地のたたずまいはブラックプール  
にはないものだ。

こことよく比較される南海岸のブライトンは初めは摂政時代の  
ジョージ四世の肩入れから出発した高級保養地だったが、鉄道開通以  
来大衆化し、階級混在型リゾートとなって、グレアム・グリーンの小  
説『ブライトン・ロック』（一九三八）のように不良少年が屯したり

もするところになった。ブラックプールにも「ブラックプール・ロッ  
ク」という、同じく金太郎館のような駄菓子があるのだが、北部の庶民  
の子にはけっこう人気があるのだが、その名を口にするとないていの  
人はジョークと思つてしまう。

北部の綿工業地帯には、年一回 *wales week* といつて、町ごとの  
守護聖人の祭日には連休が与えられるという慣習があつて、その日に  
は子供は無料の特別割引列車が走り、町が引越つたような騒ぎになつ  
た。スラムの煤煙と湿気、悪臭と単調からの解放だけでも胸が躍るの  
に、海上に突き出た三本の遊戯栈橋のどれかで、呼び物のそよ風を浴  
びてぶらつくのもいいし、エッフェル塔に張り合つて建てられたとい  
う百五十八層の塔に登ることもできた。オペラハウスさながらの豪華  
な内装のダンスホールで踊るもよし、大道芸を冷やかすもよし、夜は  
名物のイリユミネーションに酔いしれるもよしである。

一九二〇、三〇年代のランカシャーの苦難の時代には、この町はこ  
とに切ないあこがれの対象になった。ウォルター・グリーンウッドの  
高名な傾向劇『失業手当頼みの恋』（一九三三）の前半のクライマッ  
クスは、失業した若者と恋人の「ああ、ブラックプール」という絶叫  
で暗転する。

やはり三〇年代を代表するルポルタージュであるオーウエルの前出  
『ウィガン栈橋への道』も、ブラックプールへのちよっぴりやるせな  
いあこがれを下敷きに行っていることはすでにみたとおりである。

切羽づまった労働者の家庭にとつて、ブラックプールはときに駆け込み寺に似た、奇妙な役割を果たした。近くの工場町ブラックバーンの綿布工の末っ子に生まれた、のちの社会史家ウッドラフは、七、八歳のとき母と二人だけで一週間をブラックプールですごしたことがある。まだ若い母は童女のようにはしゃいで彼と遊びまわる一方、毎日何時間かを安宿の自室で「仕事」があるからと、彼を外に追い出して過ごす。「仕事相手」の男たちは出てくると、ベンチで待つ彼に気前よく金をくれた。家族を食べさせるための、子連れの「売春旅行」だったのである（ウイリアム・ウッドラフ／原剛訳『社会史の証人―二〇世紀初期ランカシャの失われる世界』、ミネルヴァ書房）。顔のささぬこの町なればこそ可能な、奇妙な効用というべきか。

小説の世界でもこの町には庶民の悩みや厄介ごとの処理の願いが託されている。ウインガーフィールドのプロスト警部ものには、祖父に犯されて妊娠した娘が同じ経験をした姉を頼つてこの町にやってくるシーンがあり、ああこれがブラックプールの定番的イメージなのだなと思う。これをブライトンを描いた、たとえばフランシス・キングの「ブライトン・ベル」あたりにみる、落ちぶれて今は下宿屋の女主人をしている伯爵家の血を引いた誇り高い老婦人と、そのお手伝いを買って出るちゃっかりした娘との、意外にしんみりとした交情といった状況設定と比べるなら、土地柄というものはあるのだと思わずにはいられない。

ヴィクトリア朝の文化はしばしば中産階級文化に同定される。たとえば、「体面尊重」(respectability) は中産階級に固有のエートスと見られやすい。しかし、スラムにもそれなりのリスベクタビリティーは厳存した。「路地で笑われるな」といった「真つ当さ」の教えがそれであり、金持ちのアメリカの叔父さんが里帰りしたときは絶対に札びらを切らせず、逆にそのもてなしで借金を背負い込むといった「意地」がそれである。

炭鉱夫のような熟練と誇りのある集団では、失業したときは自分の家を清潔に磨き上げるのがほとんど執念となつていくというのもそうした例である。だから、オーウェルがウイガンで初め紹介された清潔な失業者の家を、おそらくは典型的でないという中産階級の思い込みで去り、代わつて不潔でだらしない、朝食のとき食卓の下に尿が溢れそうな尿瓶をそのまま置いていようなどころに移つた選択は、本物の労働者が「わかっちゃいない」と批判されることになる。

けれど、それも一面の真実でしかない。ブラックプールはまさにそういう窮屈さからの恰好の解放の場であった。宿の女将たちは南のリゾートに多い老嬢オーナーたちとちがひ、似たような社会層の出であったので、労働者の一家を言葉遣いや部屋の意味でおしげづかせることはなく、彼らをくつろがせるもてなし方を知つていた。子連れ売春の斡旋なども、その変則的な一つの現れといえなくもない。ここはリスベクタブルなすべてからの解放区なのであった。

### 「マンチェスター文化」とは何か

いくつか語り残したことがある。その重要な一つに「マンチェスター文化」とは何か、それは語るに足る文化なのかという問題がある。

ある土地に何か発信に値する文化が生まれるためには、異質の文化との活発な接触の機会と、それを生かす歴史ないし伝統の素地といった条件がおそらく必要であろう。ところが、この地は前者については、一九世紀以後商業活動に必要な人や情報の流れをつうじて世界と触れ合うことになったが、後者には恵まれなかった。産業革命の始まるるかという一八世紀中頃になつてもなお「イギリス最大の村」と呼ばれる田園的な地域で、人口も二万そこそこ。以来産業資本家と工業労働者というまったく新しい、文化的伝統のない階級が急激に出現して人口増加の大半を占めることになり、しかも彼らの視野は工場や産業の外にはほとんど及ばなかった。古くからの職人、商人兼金融業者が勢力を保ってきたパーミンガムのような場所柄と違って、やがてそこから誇り高い「市民憲章」や「ガスと水道の社会主義」が生まれるといったことにはならなかった。歴史のないところには歴史をつくらうというわけで、マンチェスターでは伝統の空白を埋めようとするかのように、中世回帰現象が見られるようになった。

それを象徴するのが市庁舎をめぐるエピソードである。

現在の市庁舎は（二代目。一八二五年建設の初代はネオ・クラシック様式）一八六八年の市議会のコンペで選ばれたネオ・ゴシック様式の



マンチェスター市庁舎正面

うのである。設計者のウォーターハウスは、この二年前の自然史博物館のデザインにはロマネスク様式を採用したことにもあらわれているように、用途や土地によって様式を選ぶ合理主義者であった。機能を重視して平面計画を優先させ、いちばん目立つ正面の立面はそのあと決めるものとした。名士たちにとってウォーターハウス案はあまりにすっきりと洗練されすぎたのであろう。

デザインによるものだが、それに対して地元の名士たちから不満の声が噴き上がった。「もつとゴシック的なデザインを」というもので、ゴシックはゴシックでも、多数の小塔や急傾斜の屋根のついた、要するにもつとゴテゴテとアクの強い、派手なゴシック案を選ぶべきだったとい



市庁舎大ホールの壁画——ジョン・ケイの発明で失業した大衆が彼の家を襲撃する場面

ここの大ホールにはマンチェスター史の主な出来事を描いたフォード・マドックス・ブラウンの十二枚の大壁画がある。ラファエル前派に属する彼を選んだのは市の有力者の中世志向によるもので、描かれるエピソードの選択も彼らが行った。うち一八世紀以後は三枚しかなく、「マンチェスターの世紀」といってよい一九世紀は一枚もないのが不自然に感じられる。画の完成前に地方史家の指摘で、エピソード

のうちの二つにフィクションが入っていることが判明した。画はそのまま完成したが、問題が解決したわけではなく、実に二〇年後、市議会は秘密会を開いて、画を洗い落とし、代わって地元製品の広告を入れようという決議を行なった。幸いにこれは実行されなかったが、話を漏れ聞いた画家は憤激のあまり卒中の発作を起こして亡くなったといわれ

る。これも「マンチェスター文化」の何たるか、少なくともその一面を物語るエピソードではないだろうか。

「マンチェスター文化」といえば、すでにみた「マンチェスター派」のほかにも、『マンチェスター・ガーディアン』、ハレ交響楽団、公立大学の元祖オーウェンズ・カレッジ、それに先駆的な衛生改善活動、やはり先駆的な図書館活動など一連の知的啓蒙的活動が挙げられる。それらは重要である。またハイ・カルチャーだけが「文化」だという気もない。ただ、私にはそれらがどれだけ内発的なものであるか、いまひとつ疑問が残る。

もつとも輝かしい文化的達成の一つであるハレ交響楽団にしても、その成功は創設者チャールズ・ハレの個人的力量によるところが大きかった。彼はこの地の文化風土にときに絶望しながらも、長い時間をかけて実績を築いていった。一八五七年の美術名宝展覧会のあと、もうオーケストラは不要だとする市議会に対しては、赤字が出れば自分が補償すると申し出て継続をかちとった。一八九五年の彼の死去後も楽団を支えたのは三人の外国系商人で、ウィーンから大指揮者ハンス・リヒターを招いて危機を乗り切った。ハレ自身、ドイツ系フランス人で、一八四八年の革命騒ぎのパリを逃れてきたのである。

一八五二年にイギリスで最初の公立無料図書館がここで開かれ、ディッケンズ、サッカー、ブルワー・リットンなどの名士が列席して祝辞を述べた。外来の名士は熱弁をふるったが、対照的に地元側は

寡黙であり、とくに主な受益者である労働者は多数が晩餐会に出席したのに、その代表がスピーチを行なうということはなかった。マンチェスターはよく言ってなお家父長社会であり、労働者は「無告の民」、いや声なき民なのであった。

### 「マンチェスター・マン」

「マンチェスター・マン」という言葉がある。

元来は繊維や雑貨の類を馬の背に積んで隣接したチェシャー、ダービーシャー、あるいは山賊の巣といわれたペナイン山地を越えて北東岸諸州にまで足を延ばしたマンチェスターの行商人を指す言葉だった。一九世紀の初めにはその実態はなくなつたが名称は残り、ちがつた意味をあらわすようになった。成功した綿工場主や綿商人で地域の尊敬をかちえて、王立取引所の会員にまでなつたような人びとをいうことになつたのである。

不羈独往、勤儉力行、まじめで倫理感が高いが芸術的感度はやや鈍く、ときに粗野な頑固者であるけれど、夜郎自大に陥ることはないといふのがそのイメージで、早くからハンザ諸都市との交流を持ち、大陸の諸革命の亡命者を受け入れて重用し、その力を発揮させる懐の深さがあった。反面、ロンドンに代表される既成権益への対抗意識には強烈なものがあった。『マンチェスター・ガーディアン』のC・P・スコット（一八四六―一九三三）はその代表格といつてよいだろう。

『ガーディアン』は一八一八年のマンチェスターで起こつた「ピー

タールーの暴動」を契機に主要ロンドン紙に対抗できるリベラルな視点の自前の日刊紙がほしいという一人の商人、製造業者の出資によつて一八二一年に設立された。

創設者の長男の従弟で、まだオクスフォードの学生だったスコットが主筆に登用されたのは一八七二年のことで、以来同紙は文芸・音楽・演劇評論の質を高め、本領の海外記事を充実させ、またアイルランド問題では自治付与の立場から論陣を張つて、全国紙としての名声をゆるぎないものとした。

彼の真骨頂が発揮されたのはボーア戦争（一八九九―一九〇一）のときである。熱狂的な好戦気分のみならず、異端思想のゆえに大学から締め出されていた不遇な「町の経済学者」J・A・ホブスを南アフリカに派遣して、経済的利権と政治の結びつきの実態を余すところなく抉り出す記事を書かせた。これは、のちに名著『帝国主義』（一九〇二）に結実する。『ガーディアン』は四万八千人の購読者から七千人を失つたが、その信念と勇気への信頼は高まつた。電話や自動車を嫌い、自転車で5キロの道を通勤する古風な「男スコット」の姿は、ポンチ画のなかでいちだんと光彩を放つて見えるのであった。「最初のマンチェスター・マン」ともいふべきコブデンが、帝国との関わりをめぐる地元資本と対立し、マンチェスターとは不幸な結末を迎えたのと比べると、一九世紀の末にはマンチェスターもようやくロンドンとの対抗軸というかたちで、背骨を獲得することになつたのであるうか。

〔蛇足〕

一八七七年にジョン・ラスキンは「マンチェスターはよい芸術、よい文学を生めない、綿の品質さえ落ちていく」と言った。彼は湖水地方の美しい小湖サールミアから水を取ろうとしたことで幾分八つ当たり的にマンチェスターを非難したのだが、少なくとも文学については、以来ずっとその通りとなった。

一八四〇―五〇年代にディッケンズやディズレーリ、ギヤスケル夫人らが「イギリスの現状」問題の縮図の観があったマンチェスターをモデルに社会性の濃い小説群を発表してから一世紀もの間、この地から文学らしいものは生まれてこなかった（おそらくルイス・ゴルドディングのユダヤ人の裏町を描いた一九三二年のベスト・セラー小説『マグノウリア・ストリート』を除いて）。

ところが、一九五〇年代末に突然この文学砂漠から奇跡のように生まれた一八歳の少女シーラ・ディレーニーの作品が爆発的な評判を呼んだ。戯曲『蜜の味』（一九五九）がそれで、翌年ブロードウェイのミュージカルに、さらにその翌年にはトニー・リチャードソンによって同名の映画になった。ボビー・スコット曲のナンバーは大ヒットし、ビートルズも取り上げて、そのファースト・アルバムに収められている。

この戯曲の登場人物はほんの数人。四〇歳の「セミプロの娼婦」と一七歳のその娘。娘は黒人水兵とクリスマスに一夜を過ごして妊娠している。母はシガーなどくわえた三〇歳の車のセールスマンと結婚

し、娘は水兵が去ってから出産にそなえて靴屋とバーで稼ぎながら、やはり十代のゲイの美術学校生と奇妙に安らぎのある同棲生活を送っている。しかし、その平安は男に捨てられた母が戻ってきて消えようとしている――。

場所はソールフォード。共同墓地や屠殺場の近い、ゴミの浮いたドブ川ぞいの半地下室という設定で、戦前とかわからぬ、というより一九世紀そのままのスラムのだが、登場人物の暮らし向きは一変している。作中一人として工場や倉庫で働く人はいない。世間知も身につけている十代の美術校生が女と子供を養う気になれるのも、気ままな「セミプロの娼婦」の稼ぎで娘と暮らせるのも、福祉国家のおかげといえど語弊があるのが、彼らの生きる世界がもはや粗野な、野放しの資本主義ではない現実を映し出している。スラムもこのドラマと前後して急速に姿を消してゆく。

エンゲルスが「二重生活」を守るために転々とした住居のほとんども一九六〇年代の再開発の過程で消滅した。判明している一二軒のうちわずかに残った一軒も八二年に取り壊された（ロイ・ウイトフィールド／坂脇昭吉・岡田光正訳『マンチェスター時代のエンゲルス』ミネルヴァ書房）。マンチェスターはレニングラード（現サンクト・ペテルブルク）と姉妹都市なのだそうだが、そちらからの保存の働きかけはなかったのだろうか！。かつての工場と労働者住宅の「黒いベルト」地帯は今日では様変わりりで、かつては中心部を占めていた倉庫や事務所

が入り込み、それに駐車場や安アパートなどが無秩序に建て込んだ索漠たる空間を形成している。

中心部もむかしと同じ「商業地区」という呼び方を使うのがおかしいほど、中味が変わった。それはもうかつての風格のある倉庫、オフィス、金融機関、図書館、博物館などの公共施設から成り立っているのではなく、少なくとも卸売りや物流機能はほぼ各種小売店——百貨店、スーパー、大ショッピング・モール——に取って代わられた。「無印良品」を見つけておどろいたこともある。人出は多く賑わって見えるけれど、世界のどこにでもある無個性な街並みでしか、それはなくなっていた。

他方、あるはずの何かが見つからなかった。商工会議所である。取引所と並ぶ資本主義のシンボルである商工会議所が詳細市街図にも載っていないと思ったら、中心からやや外れた大通りに面した雑居ビルの一室を占めていることがわかった。調べてみると、かつて「東洋のマンチェスター」と呼ばれた大阪の商工会議所と比べて、いまや会員数で十分の一、職員数で五分の一程度の規模でしかないのである。会員数の方は資格の違いなどもあって単純に比べられないが、大阪の方が本場より格段に大きいことはまちがいない、この勢力交代には、ある感慨を禁じえなかった。

それはモノカルチャー都市の宿命かもしれない。

綿は偉大な世界商品であったけれど、単一産業への過度の依存は都

市に痙攣的な拡大と、同じく急激な衰退をもたらす。それは綿が与えてくれた富裕と、世界との結びつきという二つの財産を文化的成熟にまで高めるに必要な時間を許してくれなかった。周辺炭坑地帯の同時並行的な衰退も傷を深くした。マンチェスターの不幸は、富裕を洗練に、ビジネスをカルチャーに（あるいは文化資本に）転化させそこねた点にあった。その点、取引所の運命は象徴的といってよい。それが本来の機能を失ってから劇場に取って代わられるのではなく、取引所が健在のうちにもまともな劇場ができていなければならなかった。時間もさることながら、それに適合的な精神風土も、この新しく開けた田園地帯の都市には希薄だったのだろう。非国教会プロテスタントが多数を占めたことも文化における美的・情緒的側面、つまり文学や芸術に重きを置く方向よりは知的・道徳的側面、つまり学術や教育、社会改良といった方面に向かわせることになった。ユニテリアンが力を持ったことは疑いもなくビジネスの暴走への歯止めとなったであろうし、異質の文化への寛容な気風の土台となっただろうが、独自の文化の培養土となりえたかは疑問とせざるをえない。

マンチェスターは、歴史の保存だけでなくその研究でも不遇であった。決定版的な市史にまだ恵まれていないらしいのである。「半ばしか知られていない町」と呼ばれる所以であろう。ただ、そういう副題をつけたゲアリ・メッシンジャーの『ヴィクトリア時代のマンチェスター』(Gary S. Messinger: *Manchester in the Victorian Age. The*

*Half-known City*, 1985) は問題を捨うのにまことに目配りがよく、大いに参考になった。ここではほとんど使えなかったが、エイザ・ブリッグズの古典的な『ヴェイクトリア朝の諸都市』(一九六三)のパーミンガムやリーズとの比較は示唆に富む。エンゲルスがマンチエスターでなくパーミンガムで暮らしていたら、彼の「階級」概念と歴史における階級の役割についての理論はちがったものになっていて、マルクスは共産主義者でなく、貨幣改革家になっていただろうという指摘など、当否は別にして、ときには眼鏡を替えてみるものだと思うせうだけの新鮮さを味わせてくれたものだ。